

事務局通信

JASTE34のお知らせ

「第8回国際サイチョウ

会議の紹介」

【2ページ】

北村俊平さんの記事を掲載
しました。

第34回日本熱帯生態学会年次大会(福井)

日程:2024年6月28日(金) 午後 編集委員会, 評議会

6月29日(土) 午前 一般発表, 企画発表

午後 総会, 吉良賞授賞式・講演, 懇親会

6月30日(日) 午前 一般発表, 企画発表

午後 公開シンポジウム

会場:福井県国際交流会館(〒910-0004 福井市宝永3丁目1-1)

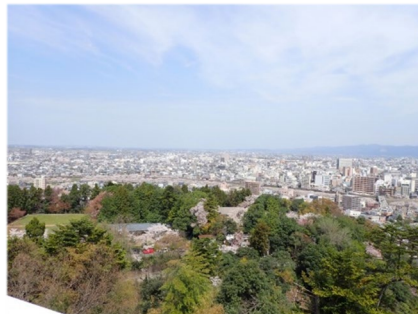
大会事務局連絡先: 淵上ゆかり (Email: jaste34fukui@gmail.com)

JASTEの福井開催は初、北陸開催は12回大会の金沢大学以来22年ぶりの2回目になります。福井県ご出身・近隣県の会員を中心に、大会実行委員会(石丸香苗委員長)を組織して実施の予定です。2024年3月には北陸新幹線が延伸し、福井に新幹線がやってきます。水に恵まれ、山と海に囲まれた地域文化が豊かな福井に是非おいでいただき、存分に交流していただける日を楽しみにしております。

参加申し込みなどの詳細については、2月以降にニューズレター、学会ウェブサイトなどで連絡します。

掲載記事

- 1 事務局通信
JASTE34のお知らせ
- 2 第8回国際サイチョウ
会議の紹介
北村俊平



第 8 回国際サイチョウ会議の紹介

北村俊平(石川県立大学)

Report on 8th International Hornbill Conference

KITAMURA Shumpei (Ishikawa Prefectural University)

はじめに

2023 年 5 月 22 日から 24 日にかけて、タイのカセサート大学森林学部において、アジア・アフリカ熱帯に生息する大型鳥類であるサイチョウ類を対象とした国際会議(8th International Hornbill Conference)が「Happy Hornbills, Healthy Forests」のテーマのもとハイブリッド形式で開催された。第 1 回(1992 年)、第 2 回(1996 年)、第 3 回(2001 年)はタイ、第 4 回(2005 年)は南アフリカ、第 5 回(2009 年)はシンガポール、第 6 回(2013 年)はフィリピン、第 7 回(2017)はマレーシアで開催されてきた。これまでの会議は 4-5 年間隔で開催されており、前回の会議終了時には、2021 年にブータンで開催予定と宣言されていた。その後、2019 年に発生した新型コロナウイルス感染症の世界的大流行を受け、2021 年の開催予定を 1 年延期して 2022 年 5 月 26 日から 28 日に開催するとアナウンスされたものの(Anonymous 2021)、最終的には、さらに 1 年延期し、開催地をブータンからタイに変更して開催された(Anonymous 2023)。

筆者は第 3 回の会議から第 7 回の会議まで継続参加してきたが(北村 2013, 2017)、今回は講義スケジュールの関係で、現地参加することはできなかった。そのため、会議の一部にオンライン参加しただけであるが、卒業研究の頃から研究対象としてきたサイチョウ類の研究や保全の現状について、会議の内容を振り返りながら、簡単に紹介したい。

本会議のシンボルとして、大会サイトや要旨集の表紙に掲載されているのはナナミゾサイチョウ(学名は *Aceros nipalensis*, 英名は Rufous-necked hornbill)である(図 1)。サイチョウ類には性的二型があり、本種のように雌雄で配色パターンが大きく異なる種もいる。図 1 のイラスト左側のオレンジ色が雄、右側の黒色が雌である。ナナミゾサイチョウはインド、タイ、中国、ミャンマー、ブータン、ベトナム、ラオスなどに分布しており(Poonswad et al. 2013)。サイチョウ類の中では、比較的高い標高にも生息し、ブータンを代表する種である。アジアに生息する 32 種のサイチョウ類の中では、インドネシアのスラウェシ島に生息するアカコブサイチョウ(*Rhyticeros cassidix*)ともに人気が高い種である。筆者も 2004 年 5 月にタイの Huai Kha Khaeng Wildlife



図 1. 第 8 回国際サイチョウ会議の要旨集の表紙。左側がナナミゾサイチョウのオス、右側がメスである。



図 2. 調査用に捕獲したナナミゾサイチョウのオス。2004 年 5 月 14 日にタイの Huai Kha Khaeng Wildlife Sanctuary にて撮影。

Sanctuary でサイチョウ類の捕獲調査を行った際、間近で見たことがあり(図 2)、オレンジ色の羽毛とカラフルなど袋が印象に残っている。

会議の概要

今回の会議は、5 つの基調講演、4 つの口頭発表セッション (Impacts of climate change on hornbills, Applied hornbill conservation, Hornbill ecology, Hornbill Evolutionary Biology and Genetics, 計 56 件)、ポスター発表セッション(13 件)から構成されていた。これまでの会議と比べて、口頭発表件数が多く、時間帯によっては 2 会場で同時進行する形式だった。会議での発表者数が増えたことは喜ばしいが、参加者がみなで同じ発表を聞くことができなくなった点は、少し残念にも感じる。しかし、20 개국 163 名(現地参加 138 名, オンライン 25 名)にまで参加者数が増加し、三日間の会議日程を考えると仕方ないことなのかもしれない。

会議全体としては、これまでのサイチョウ国際会議の3つの開催目的を踏襲するものであった。

1. Create a platform for the scientists and conservation practitioners in and outside Asia to share their research progress, findings, and innovative ideas.
2. Provide a forum for the exchange of views, disseminate ideas and development of possible future collaborations between local and international scientists and practitioners.
3. Promote long term ecological and social research and conservation partnership among multi-stakeholders in all natural habitat range countries under uncertain environment conditions.

1990年代に開催された初期の会議では、それほど研究者が多くなかったサイチョウ類に関連した研究者を結びつける目的1の役割が強かった。実際、第1回や第2回の会議の成果物は調査マニュアル的要素が強い(Poonswad & Kemp 1993, Poonswad 1998)。その後は、SNSの発達などで研究者間の情報交換が行いやすくなったこともあるが、目的2や目的3に関連した発表や取り組みが進められてきている。特に目的3の長期研究については、そもそも寿命が数十年に及ぶサイチョウ類を対象にしていることもあるが、本会議の初日と二日目の基調講演者がいずれもその重要性を強調する話題提供を行っていた。

初日の基調講演では、最初にタイ国サイチョウ財団の Woraphat Arthayukti 博士がタイでのサイチョウ類の40年間に及ぶ長期生態研究の意義についての話題提供を行った。また、初日のディナーセッションでは、同じくタイ国サイチョウ財団の Pilai Poonswad 博士がいつもながらの若手研究者を鼓舞する熱いトークで会議初日を締めくくった。いずれも地道な長期研究に基づいたデータの重要性が示される一方、継続調査、特に資金を得る仕組みづくりや世代交代しながらチームをまとめていくことの重要性を語っていた。また二日目の基調講演では Lucy Kemp 博士がアフリカのミナミサイチョウに関する25年間の研究、Apparajita Datta 博士が東ヒマラヤのサイチョウ類に関する20年間の研究に基づいた話題提供を行っている。二人はそれぞれの国でサイチョウ類の研究を継続しながら、若手を育てているだけではなく、現在、IUCNの Hornbill Specialist Group の共同代表を務めている。第3回や第4回の会議時に発表していた当時の若

手が、20年後に基調講演者として登壇している姿を見ると、本会議に関しては、ある程度、世代交代がうまく進んでいるのではないかと感じた。

本会議終了後の25日は同じ会場を利用して、午前中にインドの Rohit Naniwadekaer 博士による研究計画に関するワークショップ、同日の午後にはタイのキングモンクット工科大学の George Gale 博士による科学論文の書き方に関するワークショップも開催された。また、本会議に先立ち、2023年3月には、Global Ecology and Conservation 誌で企画されたサイチョウ特集号に掲載する論文の募集が行われ、現在、その審査が進んでいる。また、IUCNの Hornbill Specialist Group が2020年に専門誌 Hornbill Natural History & Conservation 誌を立ち上げ、いわゆるハイインパクトジャーナルには掲載されにくい、サイチョウ類に関する基礎情報の蓄積につながる研究が定期的に公開される仕組みができつつある。

今回はオンライン、しかもほとんどのセッションには参加することができなかったが、タイの共同研究者だけではなく、各国のサイチョウ研究者たちが相変わらずの熱量でサイチョウ類の基礎生態の解明や保全に取り組んでいる姿を見ることができた。次回は万難を排して、現地参加したい。

引用文献

- Anonymous (2021) Hornbill News 8th International Hornbill Conference. Hornbill Natural History & Conservation 2:57-59.
- Anonymous (2023) A brief note on the 8th International Hornbill Conference. Hornbill Natural History & Conservation 4:34-35.
- 北村俊平 2013. 国際サイチョウ会議2013参加記. 日本熱帯生態学会ニューズレター 91: 8-10.
- 北村俊平 2017. 国際サイチョウ会議2017(IHC2017)参加記. 日本熱帯生態学会ニューズレター 109: 2-5.
- Poonswad, P. (1998) The Asian Hornbills: Ecology and Conservation.
- Poonswad, P. & Kemp, A.C. (1993) Manual to the conservation of Asian hornbills. Hornbill Project, Bangkok.
- Poonswad, P., Kemp, A.C., & Strange, M. (2013) Hornbills of the World A photographic guide. Draco Publishing and Distribution Pte Ltd; Hornbill Research Foundation, Singapore, Bangkok.

編集後記



この秋は全国的にツキノワグマの出没が問題になっています。わたしが2012年から石川県林業試験場内に設置している自動撮影カメラの撮影記録も2023年秋のツキノワグマの撮影頻度は例年と比べ高くなりそうです。明るい時間帯にはほとんど撮影されていませんが、16時ごろにはコナラやイチチョウを採食している姿が撮影されています。さいわい日本では、野外調査中にツキノワグマに遭遇したことはありませんが(タイのカオヤイの森では何度か遭遇したことがあります)、クマたちが冬眠するまでは、クマ鈴だけではなく、鉈、唐辛子スプレー、ヘルメットで装備を固めた野外調査が続きそうです。

写真: 石川県林業試験場のコナラ林で撮影されたツキノワグマ(2023年10月25日)。
背中からお腹にかけてフジカンゾウの果実が3つ付着している。

ニューズレターへの投稿は、編集事務局: 北村 (shumpei@ishikawa-pu.ac.jp)・百村 (hyaku@agr.kyushu-u.ac.jp) へ。

日本熱帯生態学会事務局

日本大学生物資源科学部国際地域開発学科
〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866
Email: jaste.adm@gmail.com

The Japan Society of Tropical Ecology General Office
c/o College of Bioresource Sciences, Nihon University
1866 Kameino, Fujisawa, Kanagawa 252-0880, Japan
E-mail: jaste.adm@gmail.com

日本熱帯生態学会ニューズレター 133号

編集 日本熱帯生態学会編集委員会
NL 担当: 北村俊平 (石川県立大学)
百村帝彦 (九州大学)

NL 編集事務局

〒921-8836 石川県野々市市末松1丁目308番地
石川県立大学 生物資源環境学部
環境科学科 植物生態学分野 (C210)

発行日 2023年11月25日
印刷 株式会社ソウブン・ドットコム
電話 03-3893-0111
